

『氷室』 2025年5月号
瓢鮎抄（一九七）

春寒や案内のゐぬ案内所
仕置場の柱の礎石春の菊
長八の鰻絵の竜や春の雷
くさぐさの根元に探す蝌蚪の国
荏原橋の下より花見舟のこゑ
この辺りかつて海岸堇草
残る鴨小鴨八百万愚節
特選に豪華賞品万愚節

電磁波の飛び交ふ宇宙万愚節
ゴジラ上陸地点なる岸松の芯
あべまきの雄花揺らすや初夏の風
「世界一たぶん」と竹の子の名札
桑の実の色さまざまや虫のため
吾の目線に泰山木の咲きくれし
季語になき花ぎやうさんに咲きて夏
巨大なる捕虫囊持つ鞆草
花石榴京に平安時代より
大口を開けて豹紋鞆草

『氷室』 2025年4月号
瓢鮎抄（一九六）

摩耶山を過ぐる夕日や山笑ふ
蜜蜂に声かけて菜の花畑
麦青む道は南北まつすぐに
蒲公英の角を右へと教へられ
富士全容霞の中よ富士見橋
住職の肩に載りたる仔猫かな
春風や直真陰流剣の先
春暁や座敷童子の夢に立つ

対岸は摩天楼なる桜かな
餓鬼道へ落ちざるやうに花の宴
この街を終の住処に花見酒

夜遊の街を貫き春の雷
一豊の天守閣なり花盛り
立ち寄れば桜蕊降る野点かな
つんつんと蕾つんつん躑躅かな
我が駅の新しくなり躑躅咲く
天気持ちさうとの知らせ春の旅
渡航許可主治医に受けて春の旅

『氷室』 2025年3月号
瓢鮎抄（一九五）

立春の門掃き朝をあたらしく
旧街道ななめに走る春の雪
春泥に足をとらるる鴉ゐて
クレーンの吊上げてをる春の雪
スコップを挿したるまに残り雪
朽ち果てし坑木に春の湿りあり
駆け足の地層巡りや春の湖
比良八講般若心経北へ向き

休日の町に春めく犬のこゑ
春一番並めて斜めに竹の幹
捻ぢれたる木に名のありて梅暦
ときどきの初音に猫の耳動き
山椒の芽まづしたためるお品書
落味噌や人それぞれの死生観
富士の日と新聞に知る二月かな
交換する土産の増ゆる旅や春
雪解水にじみ出てくる破碎帯
地震断層ここにあるはず春の雪

『氷室』 2025年2月号
瓢鮎抄（一九四）

雪だるまのごとき人来る雪の坂
味噌汁の鰯のうまさや北の国
豪雪や銀山の村五百年

生野路や銀山へ雪踏みしめて
白菜の一株残しある畑
放課後の子ども群がる雪の像
冬晴や貸切バスの受験生
旅にゐて一人夕餉の蜆汁

連山の影乱れざる冬の風
冬の水背負ふオモニの村に入る
ハラル山頂浮き出してをり雪のひだ
若き牡蠣付く熔岩の忘れ潮
馬の足の骨のスープと冬の島
鏡餅のごとくに雪を積みにけり
店員の機械語ばかり寒に入る
集合のただごとでなき寒鴉
故郷の新聞を読む寒日和
寒雷や一揆記せし砂岩の碑

『氷室』 2025年1月号
瓢鮎抄（一九三）

おさむおす祇園甲部は事始
衣食住足るも足らぬも冬支度
潮引けば海蝕台に海鼠壳
手袋に熔岩の崖よちのぼる
済州の海あらゆるものを寄鍋に
白菜のキムチ皿ごとつぎ足して
済州島の夜の静かなる聖樹かな
数へ日の出国手続き忙しく

鰯起し次の列車は二時間後
一呼吸おきてはずして暦果つ
掃納めあの日失せたる貝ボタン
鐘一つ打つたび雪のしづりけり
雲ひとつなき富士山の二日かな
初春や満月西に日は東
今は亡き写真家よりの初暦
初打の火の粉きらめく鍛冶場かな
雨の音ばかり聞こえる三日かな

通勤のラッシュ遅めの七日かな